

〈書評〉

ウィリアム・フォークナー著、諏訪部浩一訳

『八月の光』 上下巻

(岩波文庫、2017 年)

倉 田 麻 里

「八月の光」とはどのような光だろう。本文には一度だけ、20 章に、主要人物のひとりでもあるゲイル・ハイタワーが、日が暮れてからすっかり落ちるまでの間毎晩繰り返してきたように、彼の祖父が所属した騎兵隊の亡霊が訪れるのを最後に待つ、まさにそのときに現れる。「やわらかくたゆたう八月の光が、いまにも完全に夜になろうとしている中、車輪は後光のようなほのかな輝きを発し、それで自らをくるんでいるかのようだ」(下 359)。「八月の光」と訳されている箇所は原文では単に“August”であるのだが、このハイタワーの毎晩の儀式については 3 章においてすでにつきのように書かれている。「彼はいま、空からあらゆる光が消え去る瞬間を待っている。陽光を蓄えた木や草の葉が、それさえなければ夜となる、かすかな光をためらいながらそっと吐き出す瞬間——夜自体はすでに訪れているのに、なおもわずかな光が大地にもたらされるあの瞬間を」(上 88-89)。

「あらゆる光が消え去る瞬間」、太陽の光をただ受容していただけの小さな存在に出し惜しむように発せられる「かすかな光」。それが「八月の光」なのであろう。だとすれば、小説『八月の光』もそうであろう。ゲイル・ハイタワーの「人生の総和」と「停止した瞬間」が触れあうとき(下 351)、すなわち彼の人生と彼を彼たらしめた過去(想像)が出会うとき、南部とその過去とが

ジョー・クリスマス、リーナ・グローブをはじめ、人物の人生のうえに交差する。ハイタワーの「名誉と誇り」と「人生」(上 89) とがそうするのとおなじように、この小説が輝きを発する瞬間はそこにある。

さらに、本書が新たに光を投じるのは、この小説が静かであるということである。「八月の光」とは、おそらく「やわらか」だけでなく、静かなものなのだろう。もちろん「そっと吐き出」されているのだからそうにちがいないのだが、なによりもまず本書の一文一文が静謐さをたたえているからこそ、そのように思われるのではないか。解説では、「作家の意識がこれほどまでに [...] 染みわたっている長編小説も珍しい」、さらには「文体そのものに意味が充溢して」いるという指摘がある。そして訳者は、「極力その『意味』を損なわないように努めた」のだという(下 405)。

実にこの言葉に出会って合点がゆく。過去との邂逅がいかに激烈なものであり、また中心的な物語の主人公であるクリスマスの人生がいかに苛烈なものであっても、あらゆる人物とそのおこないとが、それとしてあるべきものであり、なるべきものになるという運命論に支配されている以上、それは静かであるはずのものなのだ。少なくとも狂うべき余地のないものなのだから、「静か」と言い表していいはずだ。そのような静かさを人物の造形のみならず、文体によっても表現しえた小説が、『八月の光』なのかもしれない。

文体の問題は私の手には余るものの、静かさは、表現やイメージのレベルで、リーナの旅に端的に象徴されているように思える。リーナの旅は、クリスマスのたどる「円環」的な人生の道程やハイタワーが「とどまり続ける」「一点」とは対照をなし、「直線」的であるのだという(下 394)。しかし、リーナの物語が小説のはじめと終わりを結ぶように、彼女の旅もまた、すでに冒頭、「円環」のイメージを与えられている。「昼は夜へ、夜はまた昼へと平穏に乱れなく変わり、それが単調に繰り返され、いまでは後ろに長々とのびた道となっている。その道を彼女は、見分けがつかず、誰のものとも知らない、のろのろとした荷馬車をいくつも乗り継いでき進んできた。それはまるで、軋る車輪と垂れた耳のイメージが行列をなしている中を進んでいくかのようで、何かが壺のまわりを永遠に、先に進むことなく動いているようであった」(上 12)。

リーナの旅は静かである。リーナがはるかアラバマから、身重の体で恋人のルーカス・バーチを追ってジェファソンまでやってくるのができたのは、数多の助けの手が彼女に差し伸べられたからである。しかし、その数多は、どんなに先に進もうとも、どれも似通ったものである。アームスティッド夫妻のよ

うな夫婦はいくらでもいたし、家具商人のような夫婦も、たとえリーナがふたりも道連れを増やそうとも、途絶えることはない。だから彼女の旅は単一の音、単一の像に凝縮されて、おなじところをめぐるように錯覚される。リーナのめぐる「壺」は、だから「南部」でもあり、この小説それ自体でもあるだろう。

リーナはひたすら「南部」という土地を移動しながら、そこに留まりつづける。切れたネックレスから弾け「忘れ去られ」てしまった「ビーズ玉」さながらに、小さな存在が「いつまでもいつまでも宙吊りにされている」かのように静かに「南部」の地を旅するとき、それは赤土の道に通され、ふたたびネックレスの珠として輝きを放つ。リーナに終始するのみでは、この小説について語り尽くすことに、無論、なりはしない。だがこの訳業の紹介にあたり、この訳書にこそ与えられた小さな発見について記しておかずにいられない。小さな存在の発するかすかな光を捉えた作家の「相当な豪腕、そして周到な努力」(下396)。それを知り抜いた訳者による、どの一文、どの一語の光も見逃さず、新たな言語に再現し得た一冊である。